

最近の上海史研究について

——都市形成史の視角から——

小 浜 正 子

1. は じ め に

近年、上海に関する書物がちょっとしたブームである。日本でも、上海の歴史・風俗・建築・文学などについての本が続々出版され、中国でも、現地上海を中心として出版される上海に関する書物の多さには目を見張るべきものがある。こうした上海ブームは歴史研究の分野でも例外ではない。上海では、多くの上海に関する研究書や資料集だけではなく、その名も『上海史研究』を掲げる論文集¹⁾が出版されたり、上海史に関するシンポジウム「近代上海城市研究国際学術討論会」²⁾が開催されたり、また、複数の研究単位の連合体である「上海史研究中心」の設立(1990年8月)などもつたえられ、上海における上海史研究の進展ぶりが窺える。近年の上海史研究の盛行には二つの背景が指摘できる。一つは各地における地方史研究の進展であり、地域差の大きい多様な中国の各地域の歴史をそれぞれ明らかにした上で、中国史の全体像を再構成しようという試みである。もう一つは都市研究の活発化である。80年代後半になって都市研究が活性化したのは、従来、中国革命を農村革命と捉え、イデオロギー的に都市を重視しなかった中国が、四つの近代化を進める上で、その拠点となるべき都市を重視するようになったという事情がある。上海史の研究が盛んに行なわれるようになったのは、こうした状況下においてである。

上海で上海史研究に取り組んでいる研究機関は、上海社会科学院歴史研究所、同経済研究所、上海地方志編纂委員会、上海市檔案館、上海博物館、上海文史館、復旦大学、華東師範大学、上海師範大学、上海大学

など数多い。最近、そのうち華東師範大学を中心としたグループが『上海近代史』（以下、Aと呼ぶ）を、上海社会科学院歴史研究所上海史研究室を中心としたグループが『上海史』（以下、Bと呼ぶ）を、出版した。両者は共に約1000頁に上る、主として1843年の上海開港から1949年5月の上海解放までを扱った通史であり、進展目覚ましい上海史研究の、現時点における集大成と考えてよい著作であろう。本稿は、近年の上海における上海史研究のひとつの流れを、この二つの書物を主な素材として紹介しようとするものである。

両書の章別構成は次のようなものである。

A.『上海近代史』（劉惠吾主編、朱華・蘇智良・李葆葆・馮紹霆・崔美明・孫果達・忻平著、上1985年、下1989年、華東師範大学出版社）

1. 開埠前の上海 2. 外国租界の開端 3. 太平天国時代上海 4. 租界の不断拡張和上海人民の反抗闘争 5. 近代企業の産生及其初步発展
6. 殖民者の文化侵略 7. 民族民主運動在上海の興起 8. 辛亥革命在上海（以上上冊） 9. 第一次世界大戦期間の上海 10. 新紀元の開端 11. 革命運動高漲和軍閥混戦的年代 12. 在北伐軍東進的日子裏 13. 白色恐怖下的上海 14. 第一次淞滬抗戰 15. 国難声中の上海 16. 抗日救亡運動の高漲 17. 第二次淞滬抗戰和上海の淪陷 18. 孤島時期 19. 太平洋戦争中の上海 20. 抗戰勝利後の上海 21. 反对国民党統治的第二条戦線 22. 黎明前的較量 23. 上海的解放（以下下冊）

B.『上海史』（唐振常主編、沈恒春副主編、譙枢銘・盧漢超・熊月之・陳正書・鄭祖安・李天綱・吳德鐸・沈恒春著、1990年、上海人民出版社）

1. 古雲間的回溯 2. 上海的崛起 3. 海隅名城 南吳壯鼎 4. 江海通津 東南都会 5. 在砲火中開埠 6. 起義者と趁火打劫犯 7. 進入穩定發展時期 8. 洋務運動与近代企業の興起 9. 改良思潮在醞釀中 10. 維新宣伝的中心 11. 租界の擴展与東南互保 12. 成為全国經濟中心 13. 資產階級革命運動勃興 14. 立憲派活動大本營 15. 辛亥革命的關鍵地区 16. 多事的民国初年 17. 近代經濟の初步繁榮 18. 中国共产党誕生地 19. 從軍閥混戦到“四・一二政変” 20. 国民政府十年統治 21. 一種過渡形態的城市生活 22. “八・一三”英勇抗戰 23. 不屈的“孤島” 24. 租界變成日本殖民地 25. 爭取和平民主 26. 形成第二条戦線 27. 迎接解放

両書は、近代上海の総合的な通史として書かれたものであり、とくに革命史とか、あるいは租界史とかの特定の軸に沿って近代上海を論じたものではない。両者の構成にはややズレがあるものの、扱う内容は、と

りわけその前半部分（辛亥革命まで）では相当共通しており、政治・文化関係の叙述が主となっていて、経済関係はやや手薄な印象を受ける³⁾。そこには地方史としての視点や、都市研究としての視角などが混在している。本稿では、そうした豊富な内容を持った両書を都市形成史の視点から紹介してみたい。租界史を大きな柱とする近代上海の都市形成の歴史は両書の最も重要な柱の一つとなっている。両書は大部なものであり、ここでする紹介は都市形成史に限っても、網羅的なものではないが、その視角からする両書の検討は、最近の中国の研究の一つの傾向を浮かび上がらせることであろう。

2. 上海の都市形成（1）——近代上海の市街と制度の形成

初めに、近代都市上海の骨格ないし器としての市街の建設と制度の形成について検討しよう。

（1）租界について——外国人の支配下の都市形成

近代上海の市街地は共同租界・仏租界・華界の三つの区域よりなっていた。その中心は、開港後外国人の支配下に形成された市街地である共同租界にあった（本稿では単に租界と言うときは主として上海共同租界かその前身を指すものとする）。それ故、近代上海の都市形成を論じる上で、租界に関する事柄は非常に重要な位置を占める。

租界については、戦前、その支配者であった欧米や日本の研究者によって租界の形成と制度的変遷に関する詳細な研究がなされている。中国でも、建国前、主権の侵害とそれに対する抗議の歴史としての租界史研究がなされていたが、中華人民共和国成立後は、租界は列強の中国侵略の砦として全面的に否定され、租界に関する研究は長く行なわれなかった。しかし、近年、建国前の研究が復刻され⁴⁾、租界における中国人参政運動を反帝愛国運動として一定程度評価する研究⁵⁾も出現している。この様に、現在中国では租界研究に新たな動向が見え出しているようであるが、それは租界における中国主権の侵害とその回復への動きとして、ナショナリズムの問題として捉えられている。

租界問題におけるナショナリズムとは具体的にはどのようなものと考えらるべきだろうか。上海人口の変遷を見ると、開港時50万余人であった人

口が辛亥革命前夜には約 130 万人にまで増加しているが、その人口増はほとんどが新たに形成された租界区域によるものである⁹⁾。つまり、この時期の上海の都市形成とはすなわち租界の成立・発展に他ならなかった。辛亥以後、上海はさらに急激な人口増を経験し、南京政府成立時には全上海人口 260 万余人、日中戦争前夜には 380 万余人に達する。さらなる租界拡張や越界築路の建設を行なおうとする列強側とそれを阻止しようとする中国側との抗争は、人口増に伴う新たな新市街の建設の主導権とそこにおける支配権を巡る抗争であったといえる。言い換えれば、それは、“だれが” 拡大しつつある近代都市上海の建設の主体になるかを巡る争いである。こうした租界の外枠——領域——を巡るナショナリズムに対して、租界内の中国人参政運動や、会審公廨回収によって租界内の司法権を回復しようという運動は、上海運営の制度に関して“どのような” 上海を建設していくのかを問題にするものだった。すなわち、20 世紀になって活発に繰り広げられた租界の拡張反対や租界における中国の主権を回復しようという租界回収運動などの租界の主権問題とは、上海の都市建設のイニシアチブを巡る中国側と列強側の角逐の具体的表現なのである。租界の形成が外国人の支配下に行なわれる都市形成であるなら、これに対抗する中国人による都市建設の試みとしては、清末民初のブルジョアジーによる地方自治や、南京政府の大上海計画等がある。これらは中国人の手による上海の都市建設を目指すものであり、近代都市上海は、中外両者のこの様な相剋の中で形成されてきたのである。以上のように、租界問題や、中国側の地方自治・大上海計画などは、上海の都市形成との関連において捉えてゆくべきだと筆者は考えている。両書は「近代上海都市形成史」として書かれたものではないが、共にここで述べた問題に大きな関心を示し、多くのページを当てている。以下でその内容を見てゆこう。

両者はそれぞれその「前言」で租界をどの様に扱うかを述べている。A は、租界は、客観的にみて西方の先進科学技術の窓口であり中外の文化の交差点であったが、この様な租界の（積極的一筆者）側面は、第一に、外国侵略者の目的に反して起こったものであり、第二に、それは中国内部の矛盾によって引き起こされたものであることを忘れてはならない、とする。B は、通説におもねらずに独自に対象を評価することを方針と

し、混然として存在していた租界の積極面と消極面とを実証的に分析する、という。すなわち、政治上は、租界は中国の主権の侵犯だが、一面で封建政府・軍閥に対する緩衝地帯ともなっていた。租界当局は完全に自身の利益によって動く存在なので、それは進歩的勢力の味方ではないが、そのブルジョアの権力は封建政府より相対的に進歩的な意義も持っていた。経済上は、租界は外国資本主義の対華経済収奪の大本営であるとともに、それが提供する近代商工業に必要なインフラストラクチャーやセキュリティによって民族資本主義の中心地ともなった。市政上より見ると、租界は中国に近代都市のモデルを提供したのであり、それに刺激されて中国側も地方自治組織を形成した。文化上は、租界は近代西方文化の中国伝播の中心であり、租界にやって来た外国人とくに宣教師は、中国近代史において、啓蒙的な意義を持っていた。租界の影響は単純に肯定も否定もできないのであり、それを実証的に分析するのが本書の方針である。以上のように B は租界研究の方針を述べる。

この様な方針のもと、租界はどの様に描かれているのか見てみよう。

租界の形成と列強の侵略の進展について A は次のように述べる。1845 年の上海租界の設定のあり方そのものが中国の主権の侵害であった。しかしこのときはまだその程度は比較的ひどいものではなく、租界はまだ中国の政府と法の管轄を離れた「国中の国」にはなっていなかった（上 p. 55-67）。その後、1848 年の青浦事件によって清朝の弱腰を見て取った列強は租界を拡張する（上 p. 71-78）。1853-54 年、太平天国軍の迫るなか、租界は「自衛」の名目で武装するようになって中国主権の侵犯を深める。また、小刀会の蜂起によって旧来の市街地であった上海县城が占領され、多数の中国人が流れ込んだ租界は地価が上昇し商業が繁栄してゆく。これに対応して租界の憲法ともいべき「土地章程」が改訂されて、租界は「国中の国」になってゆき、租界の行政機構である工部局も設置された（上 p. 95-101, 120-130）。1860 年代初め、租界を中国政府や駐上海領事の管理下を離れた独立共和国にしようという「上海自由市」の陰謀が持ち上がるが、中国人の反対と外国公使・領事の否認により失敗した。この頃、黄浦江と蘇州河の合流点の付近から形成された租界の市街地は西へ西へと拡がって上海租界は初めて近代都市としての姿を現わした（上 p. 157-166）。その後、工部局は「土地章程」の何度かの

改訂によって権限を強化して中国の主権の侵犯を深め、1898年の改訂で租界の基本的な枠組みが完成した。租界の面積も、当初の830畝から、拡張を繰り返して1899年には32,110畝に広がった（上p.167-183, 189-198, 277-288）。また、1869年、領事裁判所の拡大したものである会審公廨が設置され、徐々に取り扱う司法事件の範囲を拡大して中国の司法権の侵犯を深めてゆく（上p.175-183, 318-323）。辛亥革命の混乱の中で、会審公廨はとうとう完全に中国政府と関係ない機構にされてしまった（上p.382-389）。Bもまた租界の形成の経過を綿密に辿るが、Aとは見解がやや異なる部分もある。Bによると、1845年の租界の始まりは単なる居留地の設定であり、主権の保持ははっきりと規定されていた（p.134-141）。しかし列強は租界の拡張を行ない、小刀会の蜂起の際には租界を「国中の国」として、在地商人の「自治政府」たる工部局を設立したのであり、1853、54年頃に主権喪失の第一歩があった（p.141-148, 177-184）。そして1860年代に租界には大きな政治的状況の変化が起こり、1866年の改訂によって「土地章程」の大枠が定まり、工部局に「土地章程」付則の制定権が与えられて、その後の工部局の権限の拡張の根拠となった（p.199-217）。租界はその後拡張を繰り返し、会審公廨は司法権の侵犯を深め、辛亥革命後、完全に租界内の司法権を奪取した（p.343-346, 416-419, 509-514）。

近代の後半、租界における中国の主権の回復へ向けての運動が活発に繰り広げられるようになるが、Aはこれにも十分な注意を払っている。すなわち、1919年、五・四運動の影響下に租界の小店主は租界行政への参加を求める参政運動を展開して上海各路商界総連合会を結成し、租界行政の諮問機関である華人顧問委員会を成立させてゆくが、これは改良主義的運動の一定の成果といえる（下p.61-65）。ついで1925年、中国共産党は「中国人の上海」のスローガンを掲げて上海ブルジョアジーが展開していた越界築路建設反対運動・工部局四提案反対運動を支持し、在華紡ストの経済闘争は四提案反対闘争と合流して民族闘争へと転化して、五・三〇運動が闘われた。翌年、会審公廨が取り消されることが決定したが、これは五・三〇運動の成果である（下p.105-123）。続いて国民革命の盛り上がりの中、漢口租界回収のニュースを聞いたブルジョアジーは改良主義的である参政運動を停止し、工部局と対等に租界管理に

当たろうという動きを見せた（下p.143-147）。南京政府成立後、会審公廨は正式に取り消されたが、新たに成立した法院でも工部局は起訴の実質的権力を握っていた。しかもこのことによって、かえって不法に制定されそれまで中国側が正式には認めていなかった「土地章程」を合法化することになってしまった（下p.183-186）。南京政府期、中国人租界参政運動にはやや進展があり、1928年には3人の工部局中国人理事が誕生して租界制度の改良に努力した。また、1931年、租界制度の将来についての調査結果として、その暫時継続を主張したフィータム・レポートが発表され、外国人はこれを賞賛したが、中国人は憤慨した（下p.214-222）。日中戦争開始後、租界は日本の占領地域の中で中立の「孤島」となったが、太平洋戦争開始後、英米が重慶政権に対して、日本が汪精衛政権に対して、それぞれ租界返還を声明し、1943年に上海租界は約1世紀の歴史の幕を閉じた（下p.348-355, 398-406）。一方、Bは後半、租界に関する叙述が手薄になっており、日中戦争時の租界の地位に関する記述に止まっている（p.795-798, 824-832）。

以上が両書の租界に関する記述の概要である。上海開港から辛亥革命前後までの記述のうち、Aは36節中の15節を、Bは49節中の9節を、またその後の日中戦争終了までの記述のうち、Aは53節中の6節を、Bは35節中の2節を、直接租界問題に当てている。このように両書、とりわけAにおいて租界問題は重要視されている。特にその前半部分に占めるウエートには非常に高いものがあるが、前述のように、この時期の上海の都市形成とは租界の形成に他ならなかったことを考えれば、それも納得できよう。

両書のうち、まずAは、何よりその着実な叙述によって租界を上海史に位置付けたことが大きなメリットと言える。その具体的経過の記述は、複眼的な視点による生彩に富むもので、英米仏の矛盾の中で工部局の支配下の共同租界と領事専管の仏租界の機構および領域が出来上がって行く様子（上p.151-157, 277-286）や、租界の行政機関である工部局——これは租界内在住の外国人ブルジョアによって組織されていた独立機構である——の権限が強化されてゆくのを、本国政府の出先機関である駐上海英国領事は歓迎しないことが多かったこと（上p.129, 159-160, 288）などが明らかにされている。そこからは中外の矛盾だけでなく、外

国勢力内部の矛盾も伴った具体的な諸勢力の相互関係の中で、租界の機構が形成されてゆく様子を見て取ることができる。後半部分においても、五・四運動期、五・三〇運動期、国民革命期などにおける租界回収運動（租界における中国主権の回復運動）の経緯が押さえられている。これらの中国近現代史上における民族運動の画期はまた、租界回収運動の画期でもあった。だが、こうした運動の租界回収運動としての側面は、そのブルジョア的性格のためか、これまでの研究ではほとんど注目されることがなかった。しかし上海におけるそれらの運動、とくに五・三〇運動はむしろ租界回収運動として闘われたという性格が強いのであり、その様な側面をも評価してゆかないと運動の正確な理解は不可能である。Aの記述はその様な意味においても注目すべきものである。上海人にとっての民族問題とは、かなりの部分租界問題であった。租界問題に注目することは、時期ごとに闘われた民族民主運動を現地上海の文脈の中で捉え直す上でも必要なのである。

一方のBもまた、租界の形成について着実な叙述を見せる。前述のように、Bは租界を積極面も消極面も持つとする立場を取るため、その評価は柔軟で、租界の設定そのものは中国主権の侵犯ではなかった（横浜の居留地などと同じようなものと見ていられると思われる）とするなど、斬新な見解を打ち出している。従来、租界の拡大＝侵略の進展とのみ捉えられてきた越界築路の建設に対しても、市内の交通の促進や、滬北や滬西の発展の上では積極的な意味もあった（p. 381, 752）と一定の評価を見せているのも注目される。今後、この様な都市形成史の視点を徹底させた近代上海都市形成史が書かれることが期待される。

（2）中国側による都市形成

以上のような租界—列強側の主導による上海の都市形成への動きに対抗する中国側の都市形成への動きについても両書は注目する。

Aは、次のように述べる。清末、上海ブルジョアジーは「自治自立」のスローガンのもと地方自治運動を発起し、李平書らが中心となって1900年に閘北工程総局、1905年に上海城廂内外総工程局を成立させ、1909年に清朝による地方自治開始に伴って上海城廂内外自治公所等に改組した。それは西方の三権分立の原則に倣って議事会・参事会・裁判所を備えた組織であり、警察も設けられていた。この地方自治運動は

上海地区の革命情勢を一步発展させたという点で一定の意義があった（上 p. 336-340）。武昌蜂起後、城自治公所理事長李平書の決断によってブルジョアジーは革命派と手を結び、上海光復が実現する。光復後、城自治公所は南市市政庁に改組され、また閘北民政総局、上海県政府が設けられた（上 p. 355-359）。この頃、日毎に発展する租界に比して県城の寂れてゆくのは対照的であり、こうした状態を打開するため城壁を撤去することが李平書らによって計られていたが反対派の運動にあって進んでいなかった。光復後、李平書は期を逃がさず城壁撤去を決定し、工事は1912年1月に開始され、1914-15年の冬には完成した（上 p. 389-393）。Aはまた、上海の新たに形成されつつある市街を中国側が取り込むか、租界側が取り込むかが争われた事例として閘北の問題に言及している。1900年、工部局は市街地の形成が進みつつあった閘北への租界拡張を目論んだ。中国側でも閘北の紳商は都市建設を進めるため地方自治機関である閘北工程総局（後に上海市馬路工巡総局と改称）を成立させた。1909年、工部局は強引に租界拡張を図るが、この問題は単に保産保業のみの問題ではなく国家主権に関わる原則問題だと目覚めた上海人民の反対によって、初めて租界拡張を断念させられる（上 p. 323-328）。辛亥革命後、閘北では商工業が発展し、地方自治の努力の成果により街路の建設なども進むが、これには単に経済的な意味だけではなく、租界の拡張を防ぐという意義もあった（上 p. 393-396）。

北京政府時期の動きとして、Aは、第二次江浙戦争時のブルジョアジーの上海保全の努力と段祺瑞政府の淞滬市設置、五・三〇運動時の淞滬市区督弁公署設立による政府のブルジョアジー籠絡への動き、続いて江南の支配者となった孫伝芳が上海ブルジョアジーに迎合するため淞滬商埠督弁公所を設立したがブルジョアジーの歓心を得ることができなかったこと、などに言及し（下 p. 99, 112, 118-120）、国民革命期の上海自治運動の経過を述べる（下 p. 134-165）。南京政府成立後、国民党は上海を第二の首都として重視していたが、租界が存在するために完全に上海を支配できなかった。そのため新たな都市の中心を建設すべく大上海計画に着手する。国民党の関心は統治の拠点造りにあったのであり、租界を動揺させる意図はなかったが、資金不足よりそもそも実現は不可能で、土地投機を進行させることになった（下 p. 178-182）。

Bもまた、清末の地方自治運動について述べ、それをブルジョアジーの立憲運動の重要な一つとして位置づけて、工商教育界知名人士の指導により、道路・橋梁などの建設、警察機構の設置、民事訴訟の取扱い、開明的内容を含む規定の作成などの成果を上げたとし、そこに愛国運動としての性格、民主運動としての性格を認める（p. 427-432）。また、辛亥革命後の上海県城の城壁撤去を取り上げ、跡地に民国路・中華路が出来て近代都市上海の基本型が成立したとする（p. 514-516）。Bは、南京政府の大上海計画を、租界は列強の在华権益の牙城であり回収は現実的には無理なので、それに代わる新しい都市の中心を建設しようとしたものとする。しかし、租界をそのままにして新しい都市を作るのでは都市全体の建設とは言えないし、80年間かかって造られた今後の都市発展の基礎となるべき近代都市上海の精華を捨て去るという現実的でない計画であり、資金的にも無理なものだったのであり、若干の道路・建物の建設と虬江埠頭の一期工事を終えただけで一・二八事件、八・一三事件により中断したとする（p. 650-664）。

以上のように、両書は中国人による都市建設の動きをも重視しており、特にAでは、都市形成への関心が強く感じられる。清末民初の地方自治と南京政府の大上海計画は、中国側の都市建設の試みの双璧というべきものであり、両書はこれらを重視して扱っている。また、Aでは閘北の都市形成を取り上げているが、これは上海の新たに形成された市街地ながら租界に編入されなかった地域を取り上げた鋭い着眼といえる。しかし、Aでは、清末民初の地方自治や大上海計画に対する評価は曖昧で、「反帝的ではなく妥協的なものであったが、しかし無視できない」（前言）という中途半端なものに止まっている。そこでは、基本的な歴史認識の枠組みとして革命史的なそれが踏襲されているため、都市形成自体に即した評価がなされていない。これに対して、Bでは、ブルジョアジーによる地方自治をより積極的に評価し、大上海計画の評価にしても、これを都市形成自体に即して評価していこうという姿勢が見えている。こうした評価のしかたはまだBの全体を貫くものとはなっていないが、従来の見解に較べると、その対比には鮮やかなものがある。

3. 上海の都市形成（2）——都市形成の主体と都市社会

次に、近代都市上海の都市形成の主体となるべき上海の住民たちと、彼等が形作った上海の社会についての記述を見てみよう。

（1）外国人——近代都市形成における二面的勢力

外国人は、従来の研究では一義的に侵略者と規定され、否定的な評価を受けてきた。だが、両書の記述には、そうしたステロタイプの評価から踏み出したものがある。

上海は近代中国におけるキリスト教布教の基地となっており、宣教師は最も早い時期から上海にやってきた外国人の一群である。教会・宣教師の行なった教育・出版活動について、両書は共に注目し、多くのページを費やしている（A上p. 238-267, Bp. 284-304）。それらは上海における近代的教育・出版事業の嚆矢であり、それに刺激されてやがて中国人による新式学校も設立されるようになって、そこから変法運動・革命運動を担う人材が育っていったという認識は両書で共通している。しかし、Aは、宣教師は中国人民の心を害するのが使命であり、その手段として教育事業を行なったのだが、その目的とは異なって愛国・革命思想を伝播させ、西方の教育制度、科学を引き入れた（上p. 243, 256）と評価するのに対し、Bでは、教会・宣教師に対して、一面的に侵略を目的とするものという規定を与えていない。また経済分野についても、Aは、外国資本主義は民族資本主義の誕生を刺激したが、その発展を阻害した（上p. 221）とするのに対して、Bは、第一次大戦前後の民族産業の黄金期について、それは外国資本にとっても黄金期であり、両者の矛盾は共同利益の上での矛盾である（p. 517）としており、民族資本と外国資本の関係を必ずしも対立的なものとはしていない。

Aにおける外国人の評価は、その本質を侵略的なものとしながらも、現実的な影響については柔軟な見方もみせるというものである。Bの評価はより柔軟で、外国人は侵略者であるとともに、近代文明の伝達者という積極的役割を担いもする二面的な存在として捉えられている。前述のように、「前言」で、租界を封建的勢力と進歩的勢力との対立において時には進歩的勢力を擁護することもあるとしている点とも併せて、Bで

は、列強・外国人の積極的意味をも認めていこうとしていると言える。

(2) ブルジョアジー——指導層

ブルジョアジーについてはどうだろうか。

A は注目される点として、まず、前述のように、ブルジョアジーによって行なわれた租界回収運動・地方自治を、改良主義的としながらも一定評価している点がある。五・三〇運動の一面を租界回収運動と捉えている A は、そこにおけるブルジョアジーについても、北京政府の籠絡によって 13 条件を提示したのはブルジョアジーの弱点の現われであるとしながらも、なお彼らは反帝の姿勢は堅持していたとする（下 p. 113）。また、A では、南京政府期の民族民主運動における上海ブルジョアジーの役割の評価にも高いものがある。ブルジョアジーを主体とする専制反対運動である一・二八事件後の「第二次憲政運動」についての記述や、一・二八後の抗日運動、一二・九事件後の抗日救亡運動におけるブルジョアジーの役割の評価は注目される（下 p. 257, 260-263, 310）。さらに、A は、従来の中国の研究では具体的検討の乏しかった南京政府と上海ブルジョアジーの関係についても相当に充実した叙述を行なっている。それによると、ブルジョアジーは南京政府初期、資金提供を強要され、新税に苦しみ、参政要求を拒絶され、挙句には総商會を活動停止させられて大きな不満を持っていたが、それでも九・一八事件以前は基本的には南京政府を支持していた。九・一八後、財政危機をブルジョアジーに転嫁させる政府に激怒した彼らは政権への反発を強め、両者の関係は冷たいものになっていったが、1934 年 11 月に国民党に対して独自の立場を貫き続けた『申報』社主の史量才が暗殺されるに至り、ブルジョアジーは敢えて国民党と争わなくなった（下 p. 171-175, 229-231, 267-269）。このように、A は、従来の中国の研究と異なって、むしろ南京政府と上海ブルジョアジーの矛盾に光を当てている。南京政府と上海ブルジョアジーの関係については、近年、欧米や日本で研究が進んでいるが、ここに示された見解はそれらと並んで検討されるべきものだと考える。

B におけるブルジョアジーに関する記述も従来にない点がある。熊月之による辛亥革命の上海光復に関する叙述は該書の白眉をなす部分である（p. 435-484）。上海光復はよく知られているように同盟会など革命派と上海のブルジョア達との共同により遂行されたわけだが、B の上海の

ブルジョア達が行なうに至った経過、すなわち上海のブルジョア達は立憲運動に真剣に取り組んでいたが、そうではない清朝に失望し、武昌蜂起後、革命への傾斜を深め、李平書が沈澱雲の手引きで陳其美と会見して上海のブルジョア達と同盟会が手を結ぶにいたった経過や、光復後の滬軍都督の地位をめぐる両者の確執などビビッドに語られていて興味深い。また B では、五・四運動において、ブルジョア中下層の大きな役割を認めるのみならず、ブルジョア上層の一部にも学生・労働者と共に闘争した部分がかった（p. 568）としている。

ここに見えるように、両書におけるブルジョアジーに対する評価は、具体的問題については若干の食い違いがみられるものの、全体として従来に比して高い評価が与えられている点は共通している。上海の都市形成を考えた場合、中国側による都市建設、つまり租界回収運動や地方自治の主体とは、主としてブルジョアジーであった。それゆえ、都市形成を視野に置いて上海史を語るとき、ブルジョアジーに対する評価は当然高いものになるであろう。いったいに、上海の近代史において、当時の人々に中国社会の指導層として認められていたのはブルジョアジー（清末では商紳という言葉のほうが適当か）であった。彼等の動向は地域社会の方向を決定する力を持っていたのである。両書に見えるような地域社会の指導層——地方エリートとしてのブルジョアジーについての研究は、民族民主運動のブルジョアの側面についての研究と共に、今後さらに進められてゆく必要があるように思われる。

(3) 「市民」（都市住民）——社会史への動き

中国の上海史研究における社会史の分野への関心の高まりは、特にこの 2、3 年顕著になった新しい傾向である。88 年の「近代上海城市研究国際学術討論会」では、「市民社会生活」というセクションが設けられ、B. Hershatte「上海娼妓」、孫国群「論旧上海娼妓制度的發展及其特点」、李天綱「從“華洋分居”到“華洋雜居”——上海早期租界社会析論」、E. Honing「論対上海的蘇北人的偏見」、B. Goodman「新文化、旧習俗——同郷組織和五四運動」、潘家春「論上海在民初新文化運動中的地位」、Yeh Wen-xin（葉文心）「從“生活周刊”看三十年代の上海小市民」の報告が行なわれた。最近では「百余年の近代上海の歴史風雲と風土民情を多方面に亘って紹介」という『上海文化史叢書』が華東師範大学出版社から刊

行を開始しているし、上海史研究中心の研究課題の中にも社会史に関するものを予定しているという。

A、B両書でも上海の社会事象に関する記述が見える。Aは、上冊の最後第8章第5節を「上海城市面貌的变化」に充て、70年間の発展を経た近代都市上海の変化について述べる。この変化の主要な特徴は日毎に深まる植民地化半植民地化であったとし、それは、都市建設における畸形的な発展のあり方、中国人と外国人の政治的経済的社会的な不平等、西方のブルジョア的な退廃した思想・意識や生活様式による中国人民の精神汚染の進行などに現われていた、とする（上 p. 397-405）。また、下冊でも第15章第4節を「洋場黒幕与社会風氣」とし、1930年代の上海について、西方のブルジョア的な退廃した生活様式の不断の流入のため上海では各種の社会問題が非常に深刻になり、秘密結社の勢力が社会の隅々まで及んでいたとして、その主要な営業分野であったアヘン、賭博、売春などについて述べる（下 p. 288-296）。

Bでは、社会史に対してさらに意欲的な姿勢が見える。まず、1860年代より「自由貿易」と「キリストの福音」の伝来によって上海で西洋文明の気風が起り、西欧的な生活様式が伝来して、そうした新生事物——例えば水道の水を使うこと——に対する中国人の心理的態度も徐々に変化していった、とする（p. 243-254）。そして、1870年代の中国民族資本工業の勃興を、帝国主義のために中国の資源を収奪する土産加工工業から起こったとする通説は誤りで、西欧の影響による生活習慣の変化がもたらした新たな需要によって形成された工業分野から起こったものである、とする（p. 282-283）。Bはまた、民国初年の上海の自由な空気について述べ、当時の鴛鴦胡蝶派の文芸の流行には民国初年の解放感と失望が背景にあるとし、五四前後の上海社会を騒がせた大事件であった上海図画美術院のヌードモデル事件について、封建禁欲主義のタブー突破の意義があった、という（p. 495-506, 554-556）。Bの第21章は、全面的に社会史を扱った「一種過渡形態的城市生活」である。若い著者李天綱の筆になるこの章は、当初の計画にはなかったものを、後で追加したのだと聞く。そこでは、上海の近代都市としての発展に伴って各種の新たな階級階層が出現したが、彼等は旧式の特徴をも留めた過渡期の都市住民であり、新旧・中西の結合した独特の生活様式を持っており、これ

は近代中国史上典型的な意味がある、とする（p. 728-729）。そして上海の住民の生活様式は内部の格差が大きいので階層ごとに分けて述べるとし、「知識階層の生活」と「市民階層の生活」の節を設ける。ついで、「幫会—城市社会的贅瘤」で秘密結社について述べるが、著者はこれを伝統社会における封建組織が近代的大都市において種々の転化を遂げたものとし、これを理解することが近代上海の社会を理解するひとつの道である、という。上海において、青幫は、実力で独立分野を作ってはそれを組織化していったので、厳格な宗法体系に乱れが起きた。その社会的基礎も変化して、青幫の中にも、革命団体へと改造する、近代都市の裏の世界で生きる、正当な事業に進出する、都市住民の兄弟的組織になるなど幾つかの傾向がみられるようになった。租界当局は秘密結社に秩序の維持を依頼していたのだが、1940年代になって租界自体が消滅すると青幫は衰退していった（p. 756-768）。

このように、Aでは、旧上海の特徴をなしていたとも言える都市的西洋的事象、あるいは秘密結社などに注意を払っているが、それを、一義的に「西欧の退廃的なブルジョア文化の流入」のためと類型的に捉え、否定的評価を与えている。しかし、Bではより突っ込んだ叙述がみえ、そこからは近年の社会史への関心のあり方を窺うことができる。Bの叙述よりそれをまとめれば、西洋と中国の文化の特殊で独自な混合である上海社会の実態を究明し、中国近代における中国と西洋の関係の具体的なあり方を考えていく、というようなものであろう。こうした生活様式・風俗などへの関心は、その主体である都市住民—「市民」に目を向けさせる。都市研究の新たなキーワードである「市民」（中国語）は、bourgeois または citizen に対応する日本語の市民の語が持つ政治主体としてのニュアンスはなく、都市住民を指すものであるが、このように地域の生活者としての側面に目を向けて上海の民衆を捉えてゆこうとするのは、新しい姿勢であろう。また、Bは、新たにもたらされた西欧的事物に対する上海人の心理的態度についても言及する。こうした心^{メンタリテ}性についての研究は、当時の上海人の意識の様々な側面について進められる必要があると思われる。例えば彼等がなぜ租界の形成＝中国主権の侵害の進展を許したのかも、当時の上海人の民族意識の在り方を踏まえて理解されてゆく必要があろう。今後の上海社会史研究に注目してゆきた

い。

4. お わ り に

ここで見てきた両書の近代上海の都市形成についての叙述は次のような特徴を持つものであった。A は、上海の都市形成への関心は非常に強く、関連する事項を綿密に取り上げて生彩ある具体的過程の叙述を行っている。しかし従来の研究の帝国主義・封建勢力に対して闘う人民という革命的な枠組みを踏襲しているため、その評価のしかたは中途半端なものになっている。一方、B では、A ほど具体的叙述は見られないが、その様な枠組みから自由になっているので、より上海の都市形成自体に即した斬新な評価が現われている。こうした両書の基本的立場の違いは、1949 年以降の上海をどう評価するかに端的に現われる。すなわち、A は、解放後の新生上海は強大な経済体系と威風堂々とした社会の姿によって社会主義中国の輝かしい成果を世界に示している（下 p. 545 一本文の最後の部分）とするのに対して、B は、1949 年以前、近代化＝資本主義化の途上で全国最高の地位を占めていた上海が 49 年以降振わないのはなぜか（唐振常の筆になる「序」より）と問題を提起する。B のような見解は、A のような従来の見解と比べるといかに大胆だが、あるいは上海人の率直な心情の表明かもしれない。

従来の固定した研究の枠組みからの解放の持つ意味の大きさは、本稿で紹介した両書における具体的問題の評価の違いを見ても明らかである。B のようないわば「革命史以後」の上海史研究は、大きな方向としては近代化の歴史を追求するものといえようが、今後の研究のより具体的な方向は今のところまだ明確でない。共同執筆になる B の著者たちの歴史観にしても相互に微妙に違いがあるように思われる。敢えて B の著者達の近代上海の都市形成に関する視角の公約数を抽出すれば、上海の近代史を、西洋文明と中国文明との相剋と共同の中で、近代都市が形づくられていった過程として捉える、といったものになるだろうか。このような関心のあり方は、現在、開放政策下で外国文化の流入のただ中にある中国の人々の問題意識を物語るものであろう。そうした中で B の著者達に特徴的だと思われるのは、単に西欧文明を受容して近代化＝資本主

義化を図ることのみを指向するのではなく、より中国の伝統を重視し、それと西洋文明との相互作用として中国の近代を考えていこうという姿勢が濃厚なことである。社会史研究は、そうした関心のより突っ込んだあり方として始められている。今後、上海社会史研究が、単なる好事家の興味を満足させるものに止まらない、上海社会の内部構造の究明を深めるものとして進展することを期待したい。

本稿では、『上海近代史』『上海史』両書を材料として、近年とくに盛んになってきた上海における上海史研究の動向を、近代都市形成に関するものに限って紹介してきた。そこには、一部で研究機関間の交流の少なさを窺わせる不十分な記述も見えないわけではないが、さすがに地元では実証研究が進展していると思わせられる部分が多かった。そのような研究の進展は両書の都市形成に関する叙述だけにいえることではない。都市研究と並ぶ上海史研究のもう一つの流れである地方史の視角からの上海史にも、両書はこれまでにない成果を見せている。とくに共産党史については、五・三〇運動、国民革命における共産党の指導のあり方や四・一二クーデター以後 1949 年 5 月の上海解放までの地下党史など、これまで知られていなかった点を明らかにして興味深い。是非とも直接両書を紐解いてみたい。

註

- 1) 『上海史研究』, 学林出版社, 1 編は 1984 年, 2 編は 1988 年。
- 2) 「近代上海城市研究国際学術討論会」は 1988 年 9 月に上海社会科学院と米国米中学術交流委員会・米国科学院社会科学研究委員会の共催によって上海で開催された。上海史地方志辦公室編『上海研究論叢』（上海社会科学院出版社）の 3～4 輯である『通往世界的橋（上・下）』はその報告書である。
- 3) 経済史に重点を置いた上海史としては、上海社会科学院経済・歴史両研究所が『上海城市研究』を 1991 年中に出版予定であると聞く。
- 4) 『上海公共租界史稿』, 1980 年, 上海人民出版社。
- 5) 盧漢超「上海租界華人参政運動述論」, 前掲『上海史研究』2 編所収。
- 6) 鄭依仁『旧上海人口変遷の研究』, 1980 年, 上海人民出版社, 参照。

最近の上海史研究の紹介には、他に、陳祖恩「中国における上海史研究の現状」が『東方』誌に近日掲載予定である。併せて参照せられたい。